



町民文芸

只見短歌会

三月詠草

大塚栄一

指導

遠く望む雪の浅草背景にゆびそ柳は青み初めたり

馬場 八智

残雪の多き庭地に日差し受く福寿草はや二輪咲き初む

関谷登美子

八十六歳の従姉のケーキの蠟燭に「8」と「6」とを逆に立てやる

新国由紀子

豪雪の只見の地にも池の辺の氷柱の滴春を告ぐるや

渡部ゆき子

あれこれと惑ふ思ひを振り払ひ心任せに生きてゆかむか

小倉キミ子

幼子が昔はなどと言ふを聞き笑ひこらへて相づちをうつ

目黒 富子

人生の先輩らより様々な励ましの言葉に胸こみ上ぐる

飯島小百合

残雪の上に散らばる野菜くず周りを囲むは鴉の群れか

渡部ヨリ子

施設より帰ればいまだ雪残る裏の鉢棚に夕茜差す

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

四月例会

目黒十一

指導

地下水を汲む山毛櫨の根に雪解くる
狐火と見たり春田のどじょう捕り

幸生

画像より手術告げらる余寒かな
露の香の指をしばらく楽しめり

恒夫

木漏れ陽や一人ベンチで漱石読む
春風のごとく颯爽と新入生

信

ねんごろに包み納めり陶雛
掌にしばらく在りぬぼたん雪

礼

おかえりと言う母の声桜もち
仕事着をジクザクと縫う春日かな

都

鯉幟り雨に打たれて泳がれず
四本が頬寄せ合って福寿草

一穂

春の昼話題一つで長咄
彼岸過妣の白ひの黄楊のくし

味代子

春耕や亡母使いし鋏を手に
塀越えに今ぞとばかり白木蓮

修一

おかえりと声かく朝や燕来る
あの桜咲けば播く種母の言

弘子

百寿祝ぐ謡朗々初桜
一升餅背によちよちとよろよろと

吉見

